

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
1 ICTの効果的な活用や様々な学習形態を工夫することで、主体的・対話的で深い学びを実現し、論理的思考力、批判的思考力及び課題発見・解決能力を育成する。	① ICT機器によるGoogleclassroom、ロイロノートといったアプリケーションを積極的に活用し、効果的な使い方を研究し、授業改善を実践する。	教務課 各教科	ICT機器によるGoogleclassroom、ロイロノートといったアプリケーションの活用により、学習効果が高まった(aよく+bやや)と感じている生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	89.7% B (a35.0%+b54.7%)<87.6%>【87.7%】 1年 88.3% B (a35.1%+b53.2%)<85.5%>【86.8%】 2年 93.5% A (a37.8%+b55.7%)<92.8%>【85.0%】 3年 87.6% B (a32.6%+b55.0%)<84.5%>【91.4%】	a評価+b評価が89.7%となり、中間評価より微増し、あと少しでA評価であった。ここ3年間続けて、最終評価はA評価に近いB評価であり、高い水準を維持している。来年度は中間評価も最終評価もA評価になるよう、ICT機器によるGoogleclassroomやロイロノートといったアプリケーションの効果的な使い方の研究に重点を置き、新たな具体的方策を提案していきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	② グループワークやペアワークなどの授業形態を積極的に取り入れ、生徒の対話の場面を設定し、教師による講義中心型の授業からの脱却を図る。	教務課 各教科	日々の授業において、グループワークやペアワークなどの授業形態を取り入れ、生徒の対話の場面を(a多く+b時々)設定している割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	70.9% B <79.6%> 【79.6%】 (a 43.8% + b 27.1%)	a評価+b評価が70.9%となり、ぎりぎりB評価にとどまった。中間評価や昨年度の最終評価から9%近く落ち込んだ。中間評価と比較すると「a:よくあてはまる」が13.2ポイント増加した一方で、「c:あまりあてはまらない」が20.4%から27.1%と増加し、「d:あてはまらない」は0%から2.1%となった。効果が実感できずに講義中心型の授業に戻っている教員もいるようである。来年度はお互いこどのように授業にグループワークやペアワークに取り入れ、生徒がどのような反応であったかなどの情報交換の場を設定したり、授業を参観し合う取組を導入するなど、さらなる授業改善を促していきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	③ 授業において、生徒が自ら課題を見つける活動を取り入れ、教師と生徒及び生徒同士が意見交換する場面を積極的に設けることで、論理的思考力や批判的思考力を育成する。	教務課 各教科	日々の授業において、生徒が自ら課題を見つける活動を取り入れ、教師と生徒及び生徒同士が意見交換する場面を(a多く+b時々)設定している割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	79.2% B <83.7%> 【76.4%】 (a 27.1% + b 52.1%)	a評価+b評価が79.2%で中間評価より4.5%減少し、昨年度の最終評価よりは2.8ポイント上昇した。中間評価はA評価であったがB評価に戻り、昨年度のB評価と同じ結果となった。この具体的取組③は具体的取組②と少なからず関連があり、具体的取組②と③の評価が同時に減少した。来年度はA評価になるよう、毎回の授業で生徒が自ら課題を見つける活動をどう取り入れるのか、生徒同士が意見交換する場面をどう設定していくのか、教員間の情報交換や実践報告の場を多くしていきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> 生成AIは社会を変える。これを活用する授業や取組はあるか、増えているか。 近年、若者の考え方が変化してきており、AIを利用して楽をしようとする生徒が増えてきているのではないか。努力すること自体を楽しむことの大切さも教えてほしい。 						
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> ICTの導入によって、文字以外の視覚情報を幅広く活用したり、英文や小論文の添削にAIを活用したり、生徒にもその方法を教える等の取組を行っているが、生徒の学力向上につながるよう、さらに工夫していきたい。 AIは活用する方法が大切であると考えている。すぐに解答を求めるのではなく、しっかりと考えてから利用することの大切さを教えていきたい。 						

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
2)個別面談の充実、探究活動を主とする学習活動、さらにはデジタル・理数分野への理解を深める教育活動を積極的に行い、生徒一人ひとりの可能性を引き出し、早期から進路調べやキャリア教育を積極的に行うことで、進路実現に向けての意欲と主体性を育む。	①	進路指導課 学年 教科	面談や進路学習、進路の行事を通して、自らの進路選択に関する知識を十分に得ることができた(aよく+bやや)とする生徒の割合が A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 75%以上	88.5% B (a 33.0%+b 55.5%)<87.1%>【88.8%】 1年 86.6% B (a 29.9%+b 56.7%)<85.9%>【83.8%】 2年 89.0% B (a 29.8%+b 59.2%)<87.5%>【89.5%】 3年 89.6% B (a 38.3%+b 51.3%)<87.8%>【93.4%】	全体値を昨年の同時期と比較すると、ほぼ横ばい傾向である。 1・2年生には看護医療系ガイダンスと保育・幼児教育系ガイダンスを、2年生には10月に「夢ナビライブ」のオンライン視聴を通して、大学や研究室、講義に触れる機会を設けることができた。また3年生には2学期中に共通テストに関する説明会を、11月に出願説明会を実施した。各担任による生徒との継続的な面談も効果を上げていると考えられるため、今後も進路について具体的に考えることができる機会をつくっていきたい。	CまたはDの場合、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	②	探究・DX推進室	(1・2年生)総合的な探究の時間を始めとする様々な探究的な活動を通して、社会問題により関心が高まり、卒業後の学びたい学問分野・領域等(将来やりたい仕事等)が年度当初に比べ、より明確になった(aよく+bやや)と感じている生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	86.6% A (a35.3%+b51.3%)<74.9%>【76.3%】 1年 82.5% A (a26.8%+b55.7%)<75.7%>【68.5%】 2年 88.4% A (a38.0%+b50.5%)<74.0%>【74.6%】 3年 88.0% A (a39.4%+b48.6%)<75.2%>【86.4%】	昨年度とは異なり、1・2年とも全生徒が最終発表会を行ったため、他者からフィードバックをもらう機会や自分の興味関心がある分野に関わる時間を増やすことができた。また11月に教員向けの探究研修を行い、教員の探究活動に関する知識や技能も高まり、生徒の良き伴走者として探究活動に関わることができた。以上のことなどから昨年度と比較してより良い評価となったと考えている。今後もこうした取組を継続しつつ、進路課をはじめとする異なる分掌とも連携しながら、様々な活動をさらに充実・発展させていきたい。	CまたはDの場合、改善策を検討	年度末に生徒アンケートにより評価する
	③	探究・DX推進室	探究的な活動の過程(課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現)において、数理・データサイエンス・AIなどを適切に活用できる(aよく+bやや)と感じている生徒の割合が A 75%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	※参考(12月集計) 78.6% A (a19.1%+b59.5%)【69.6%】 1年 71.6% B (a17.9%+b53.7%)【73.4%】 2年 80.8% A (a19.6%+b61.2%)【60.7%】 3年 81.8% A (a19.5%+b62.3%)【76.3%】	教員を対象とした生成AI研修を2度実施したこともあり、教員が生成AIに関する最低限の知識と技能を身につけることができた。そのため探究活動においても、担当者が生成AIに関する様々な留意点を伝えることができた。また、必要に応じてデジタルラボの機器を活用し、探究活動を行う生徒グループも散見された。今後は、デジタル機器を目的ではなく手段として利用する生徒がより増えていくことを期待する。また今年度は、8月に希望生徒を対象とした、近年興味・関心を持つ生徒が増加してきている分野であるデータサイエンスについて、DXツアーと題する、滋賀大学データサイエンス学部データサイエンス学科でデータサイエンスの講義を聴講する機会を設けた。来年度は、さらに開講予定の『理数探究基礎』を整備し、希望者に限らず、学校全体でデータサイエンスの最低限の知識・技能が身につくシステムを準備していきたい。	CまたはDの場合、改善策を検討	12月に学校評価にて評価する
	④	進路指導課から各学年、教科に方針を発信することにより、教員全体の相互理解を深め、生徒の進路志望を実現するための学力向上の取組を組織的に行う。	進路指導課 学年 教科	学問分野・領域等が一致している割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	年度末に集計 R7最終 78.9% B【参考:R6最終 61.0%】 ※参考【成果指標】(生徒) 3年生:1学期末に生徒が志望した学問分野・領域等と、進学先の学問分野・領域等が一致している	学年と協力しながら学問分野への理解を深めてきた。特に3年担任を中心に生徒一人ひとりの進路について、面談を中心とした適切な指導がなされたことにより、学問分野・領域において進学先と一致している生徒の割合が増えた。次年度も今年度の取り組みを活かしつつ、学年と協力しながら生徒の納得のいく進路指導を進めていきたい。	CまたはDの場合、改善策を検討
			進路を実現するため、学力を向上させることができた生徒の割合が A 65%以上 B 55%以上 C 45%以上 D 45%未満	年度末に集計 R7最終 1年 69.5% A【参考:R6最終 1年 58.3%】 R7最終 2年 51.1% C【参考:R6最終 2年 42.3%】 ※参考【成果指標】(生徒) 1・2年生:学力を向上させることができた ※総合学力テストの国数英3教科総合の全国偏差値で比較(1年は7月と1月、2年は1年7月と2年1月)	1年生では課題提出の徹底や希望制の補習の実施等によって、学力を伸ばした生徒が増えた。また、行事やクラス活動などで生徒に役割を担ってもらうことで本人の自己有用感を育て、学習活動に好影響を与えていることが数値を押し上げたと考えられる。2年生では中・上位層が伸びている一方で下位層が低迷している。学習習慣の有無による学力の二極化が進んでおり、集計結果は芳しくなかった。改善策としては、担任との面談を中心に、どのような進路でも学び続けることの大切さを伝え、学習活動の意義を再確認しながら学習意欲を喚起できるように進めていきたい。	CまたはDの場合、改善策を検討	1、2年1月総合学力テストの結果で判断する
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> 入試が多様化しているため、より早期の進路情報の提供をお願いしたい。 探究やDXの取組として行われている各種の企画や事業について、どの生徒も参加することができるのか。 DXの取組として行われている3DCGの作成や3Dプリンタの活用、ドローンの操作やプログラミング等に取り組む機会はどの生徒にも提供されているのか。また、教育課程上の位置づけはどうなっているのか。 						
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	<ul style="list-style-type: none"> 2年の保護者を対象とした進路説明会を2月に新規に導入した。今後も情報発信を適切に行っていきたい。 探究活動やDXの取組は、企画・事業ごとに、教育課程に位置づけた全員を対象としたものや希望制のもの等多様であるが、文系・理系を問わず参加が可能であり、今後もこのような取組を充実させていきたい。 						

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
3 教職員はICTを効果的に活用し、生徒の教育活動における個別最適化を図るとともに、多忙化の改善に取り組む。	① ICT教育支援サービスを活用したり、課題を精選するなどし、個別最適な学びの実現を目指す。	各学年	ICT教育支援サービスを活用することや、朝学習や課題に取り組むことで、自らの学力を高めることができた(aよく+bやや)と考える生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	75.1% B (a22.8%+b52.3%)<68.9%>【77.8%】 1年 74.0% B (a19.0%+b55.0%)<74.0%>【75.1%】 2年 74.4% B (a20.6%+b53.8%)<65.3%>【73.6%】 3年 76.5% B (a27.5%+b49.0%)<68.1%>【85.3%】	【1年】 昨年度同様、B評価である。スタディサプリEnglishについては、全体的に取り組みが定着し、教科への興味・関心につながっている。スタディサプリ(3教科:国語・数学・英語)については、生徒それぞれの適性に応じた連動課題配信の活用により、個別最適な学習の強化ができています。いずれのツールにおいても、生徒が、学んだ内容を定着させ、活用できるようにするために学習形態を工夫していく必要があると考える。 【2年】 学年全体の取組として、朝学習での「情報」の復習を行っている。週1回ではあるが、意欲的に取り組んでいる。各教科では、理科や歴史の授業で復習課題を配信し、基礎基本の定着を図っている。スタディサプリEnglishの取組も継続しており、自ら積極的に学習を進めている生徒も多数いる。今後も積極的な活用を促していきたい。 【3年】 「情報 I」の動画を朝学習用に配信する等、生徒の学習の理解度に応じた学習用アプリ内の動画視聴と確認テストの活用をはたらきかけている。今後は小論文講座や総合型選抜対策などの動画を紹介し、さらなる活用を促していく。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	② 業務負担の軽減や時間管理の改善などにより、職員の多忙化改善を進める。	副校長 教頭	時間外勤務が80時間を超える教員の月平均の人数が A 0人 B 2人未満 C 3人未満 D 3人以上	月平均1.1人 B <2.0人> 【2.6人】 (単位:人) 4月 5月 6月 7月 8月 9月10月11月12月 平均 80時間以上 3 1 1 3 1 1 0 0 0 1.1 内100時間以上 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0.0 <R6:80時間以上 5 7 3 1 1 4 1 1 0 2.6	12月までの長時間勤務者数の月平均は1.1人で、中間評価(7月まで)の2.0人や昨年度の2.6人と比べ減少し、B評価となった。毎月2回の定時退校日の設定・実行、採点省力化ソフトの利用やGoogleフォームを利用したアンケート集計等業務負担軽減に向けたICT活用、県教委産業医による長時間勤務者に対する面接指導の実施等による意識改革等の取組の効果が着実に現れてきている。学期始めや部活動の繁忙期(主に上半期)の時間外勤務の増加はある程度やむを得ないところはあるものの、それを当たり前とせず、改善できる点を探し見直していくほか、授業や校務においても見直しを持ちながら、ICTのさらなる活用をはじめとした業務改善や業務の偏りの是正等に引き続き取り組み、多忙化改善につなげていきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	勤務時間記録により年度末に評価する
学校関係者評価委員会の評価		<ul style="list-style-type: none"> ICTやAIを活用することによって勤務の効率化に繋がると考える。 ICTのさらなる活用によって、より効果的に個別最適な学びを実現していくことが可能となると考える。 					
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針		<ul style="list-style-type: none"> ICTやAIの導入によって、時間がかかる工程を瞬時に終わらせることもできると考えている。教員も授業やその準備、添削等に活用しており、効率的な勤務の実現につながっていると考えている。 ICT教育支援サービスの活用をさらに推進し、生徒が自身にとって最適な学習を選択できるよう、さらに工夫していく。 					

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
4 部活動や生徒会活動の活性化とともに、地域行事への積極的参加を通して地域貢献に努める中で、視野を広げつつチャレンジ精神やレジリエンスの涵養を図り、明るく活力ある学校づくりを推進する。	① PTA活動等への保護者の積極的な参加を促し、本校の教育活動をバックアップしていただく。	総務課	学校行事やPTA活動で保護者が来校した、または職員とのやりとりを電話などでした回数の平均が3回以上の割合が A 60%以上 B 50%以上 C 40%以上 D 40%未満	3回以上の割合 D 5回以上 11.2% < 4.1% > 【18.9%】 4回 8.2% < 2.7% > 【12.6%】 3回 19.3% < 14.2% > 【24.0%】 2回以下 60.7% < 79.0% > 【44.6%】	3回以上来校または職員とのやりとりをされている保護者が38.7%で、昨年度の55.5%より16.8ポイント減少した。PTA朝の挨拶運動(参加者307名→188名)や明倫祭(外部来校者914名→839名)に来校される方が減少したためと思われる。学校の活動を見たり、教職員と情報共有をしたりする機会を積み重ね、本校の教育活動を理解、協力していただく等、生徒支援を充実させていきたい。引き続き各種連絡への取組を強化するとともに、より効果的な連絡方法を考えていく。	Dの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	② 本校の教育活動、生徒の活動の成果をホームページ上に掲載し、広く情報を発信する。	総務課	ホームページ上のアクセス数が月間平均で A 80,000以上 B 70,000以上 C 60,000以上 D 60,000未満	ホームページのアクセス数(単位:件数) 月間平均 98,599 A 【102,862】 4月 154,953 【73,115】 9月 73,502 【92,406】 5月 101,144 【79,052】 10月 56,981 【58,323】 6月 93,272 【124,258】 11月 101,352 【134,276】 7月 95,732 【161,570】 12月 79,039 【103,483】 8月 116,655 【103,483】	各課・学年行事や部活動について毎日の更新ができるよう呼び掛けており、今年度も学年だよりを紙の配付ではなくホームページ掲載とした。アクセス数の月間平均は前年度に比べて4%程度減少したが、前々年度(42,056件)に比べるとおよそ2倍となっている。今後も掲載内容についてPTAの意見等を伺い工夫を続けていく。	Dの場合は、改善策を検討	年度末に評価する
	③ 部活動の加入を促し、学校全体の活性化を図ることで、生徒のチャレンジ精神の向上とレジリエンスの獲得を目指す。	生徒課	1・2年生の部活動の加入率が A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	88.1% A < 85.5% > 【85.1%】 1年 89.7% A < 80.7% > 【90.7%】 2年 86.7% A < 89.7% > 【80.0%】	昨年度より部活動の入部を自由選択としたが、入学直後のガイダンス等の機会を利用して部活動加入の良さを強調したこともあり、加入率は高い数字を保つことができたと考えられる。ただ、制度を変更して2年目でもあり、途中退部する生徒もいるため、今後どのような推移になるかを見守る必要がある。	Dの場合は改善策を検討	12月に評価する
	④ 生徒会行事、地域の行事への主体的な参加を促し、生徒一人ひとりが充実感・達成感を得ることができる取組を推進する。	生徒課	委員会・生徒会活動、地域の行事に主体的に参加し、充実感・達成感を得ることができた生徒(aよく+bやや)の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	67.1% D (a23.9%+b43.2%) < 62.2% > 【66.0%】 1年 63.2% D (a21.6%+b41.6%) < 61.6% > 【60.1%】 2年 65.3% D (a22.9%+b42.4%) < 61.5% > 【65.2%】 3年 71.8% C (a26.5%+b45.3%) < 63.4% > 【73.3%】	部、委員会によっては積極的に地域の行事に参加し、割合がここ数年上昇しているが、70%に達しないのが現状である。学校が準備する行事だけでなく、生徒自らが行事を計画・実施をすることによって、下級生も参加しやすく、より達成感を得ることが可能となると考えられるため、さらなる改善を図っていきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
学校関係者評価委員会の評価	・総合型や学校推薦型選抜等、入試が多様化してきており、リアルな体験をふまえた志望理由書を作成するためにも、部活動等の学校活動の充実が求められていると考える。						
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	・担任や学年主任が、生徒一人一人とこまめに面談を行い、その生徒にとってどのような受験方法が適切かを提案しているが、多様な入試への対応に限らず、生徒が充実した学校生活を送るためにも、部活動を含む学校活動に活発に取り組んでいけるような方を模索していく。						

重点目標	具体的取組	担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
5) 節度ある生活習慣の確立に努め、自ら挨拶し、読書に親しみ、ボランティア活動等にも積極的に参加する心豊かな人材の育成を図る。	① 登校指導や生活指導などを通して、挨拶がしっかりできる人間の育成を図る。	生徒課 各学年	朝の挨拶運動などで、生徒同士や教職員、外部からの来客に対し、進んで自分からしっかり声を出し挨拶できた(aよく+bやや)生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	83.1% A (a33.9%+b51.2%) <84.2%> 【82.4%】 1年 84.4% A (a33.3%+b51.1%) <83.7%> 【78.8%】 2年 81.6% A (a28.2%+b53.4%) <80.7%> 【81.9%】 3年 83.2% A (a33.9%+b49.3%) <87.5%> 【86.8%】	生徒は自分から進んで挨拶をしていると答えているが、教員からは同じように感じていない意見(53.0%)もある。最近では声を出して挨拶をする機会が減ってきているので、生徒自身から積極的に挨拶することができるような取組を考えていきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	② 登校指導や生活指導などを通して、自ら身なりを正すことで規範意識を育成する。	生徒課 各学年	制服を意識的に正しく整えている(aよく+bやや)生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	96.9% A (a64.7%+b32.2%) <98.1%> 【97.7%】 1年 97.8% A (a72.7%+b25.1%) <98.7%> 【97.4%】 2年 95.8% A (a61.1%+b34.7%) <99.3%> 【97.5%】 3年 97.3% A (a61.7%+b35.6%) <96.6%> 【98.1%】	多くの学校で制服の着こなしを多様化させている状況があるため、制服の着こなしについては、今後も教員間で共通理解をもって指導できるよう努めていきたい。	B以下の場合には、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	③ 交通安全教室や街頭指導を通して、自転車の安全運転の励行を図る。	生徒課 各学年	交通ルール(自転車運転でイヤホン着用や並列走行をしない)を遵守している(aよく+bやや)生徒の割合が A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	97.4% B (a65.4%+b32.0%) <97.1%> 【97.4%】 1年 98.7% A (a67.5%+b31.2%) <97.0%> 【97.1%】 2年 97.0% B (a64.9%+b32.1%) <96.2%> 【97.2%】 3年 96.7% B (a64.1%+b32.6%) <98.0%> 【98.1%】	周辺に居住されている方々からも注意の電話を受けており、自分だけではなく、他者の命も守ることができる、地域に愛される明倫生を育成するためにも、交通ルールの遵守について継続して指導していきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	④ 学校内外のボランティア活動への積極的な参加を促すとともに、ボランティアに参加したことへの達成感や地域貢献への意識を高める。	生徒課 各学年	ボランティア活動に、積極的に参加した生徒(aよく+bやや)の割合が A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	56.4% C (a20.6%+b35.8%) <64.4%> 【60.1%】 1年 54.1% C (a21.6%+b32.5%) <70.1%> 【57.9%】 2年 51.9% C (a20.2%+b31.7%) <59.2%> 【55.4%】 3年 62.0% B (a20.1%+b41.9%) <64.7%> 【67.4%】	一昨年、部活動単位で複数回ボランティア活動を計画・実施する新しいかたちに変更してから、多くの部が10月を中心に活動している。今後このかたちが定着することによって、生徒自らがボランティア活動に参加する意識が高まることに期待したい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	⑤ 生徒の良好な人間関係作りを支援する。	相談室 各学年	学校生活が楽しいと感じる生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	91.5% A (a47.9%+b43.6%) <93.6%> 【93.6%】 1年 92.6% A (a50.2%+b42.4%) <95.7%> 【93.8%】 2年 93.8% A (a51.1%+b42.7%) <94.3%> 【93.7%】 3年 88.6% B (a43.3%+b45.3%) <91.2%> 【93.4%】	昨年度の最終評価、今年度中間評価より2.1ポイント下がっている。ほとんどの生徒が学校生活について肯定的に評価をしている。特に2年生の満足度が高い。一方で、1.5%が「全く当てはまらない」と回答しており、3年生では3%に上っている。進路での苦悩は当然であるがそれ以外の場合には相談室などでの対応が重要である。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	⑥ 情報の収集、共有を密に行い、困難を抱えた生徒に対して早期に対応し支援する。	相談室 生徒課 各学年	いじめや人間関係などの生徒の変化に対して、素早く察知し、対応することができたかのアンケートをとり、あてはまる割合が A 95%以上 B 90%以上 C 80%以上 D 80%未満	いじめへの早期の取組 100% A (a56.9%+b43.1%) <100%> 【88.7%】 問題への早期の対応 96.0% A (a43.1%+b52.9%) <98.0%> 【88.7%】	いじめへの早期発見について、学校全体で取り組んでいると意識されており、この状況の継続が大切である。問題への早期対応は個々がアンテナを高くすることも大切だが、ほとんどの教員が意識し、効果的に対応している。生徒の人間関係の問題については、根絶できるものではないが、常に意識して早期に発見・対応していくことが重要であり、この状況を維持していきたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	⑦ 定例清掃の活動を通して、環境美化意識を高める。	保健環境課	環境美化を意識し真面目に清掃に取り組んでいる生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	92.1% A (a46.0%+b46.1%) <93.6%> 【93.9%】 1年 91.4% A (a44.2%+b47.2%) <91.9%> 【90.8%】 2年 90.8% A (a40.8%+b50.0%) <92.0%> 【95.8%】 3年 93.9% A (a52.0%+b41.9%) <93.6%> 【95.0%】	1年生では、昨年よりa+bでほぼ横ばいである一方、2年生では、昨年度より5ポイント、3年生では1.1ポイントの低下が見られたため、全体的には、前年度より1.8ポイント下回っており、環境美化に取り組む意識の低下が見られる結果となった。清掃や環境に対する意識を向上させ、愛校心につながることを期待したい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	年度末に評価する
	⑧ 図書委員による、図書便り・書籍紹介等の作成・発行等の図書案内の取組や一斉読書指導によって、読書の習慣化を促すとともに、探究活動等においても図書室を活用していく。	図書室	生徒一人あたりの年平均貸出冊数が A 5冊以上 B 3冊以上 C 2冊以上 D 2冊未満	2.85冊 C <1.0冊> 【1.82冊】	新入生図書室ガイダンス、総体・総文時の1年生の一斉読書で、本校図書室利用方法や読書に親しむ機会を設けている。図書だよりでの推薦図書紹介、図書委員によるビブリオトークでの推薦図書を図書だよりや廊下展示での紹介によって、例年より多い1年生の来室、貸出や、新入大会時の読書の時間で平均貸出冊数が増加した。また、ガイダンスでの呼びかけやBGM使用の雰囲気作りを継続したことにより、「総合的な探究の時間」での調査活動等での図書室利用も徐々に増えてきた。学年や探究DX推進室との連携も密にし、レファレンス機能としての利用も呼びかけたい。	CまたはDの場合は、改善策を検討	年度末に評価する
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> ヘルメットの着用や自転車の安全な運転等、交通ルールを遵守できる生徒の育成に取り組んでほしい。 放課後や休日に勉強する場所を学校外に求める生徒がいると聞いている。学校には生徒が各自で勉強できる場所はあるか。 						
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	<ul style="list-style-type: none"> 自転車の運転に関する外部講師による講演会等、さまざまな機会を捉えて交通安全の重要性を説いている。生徒の安全にも関わることであるため、今後も継続していきたい。 生徒は、学習室や職員室前の質問テーブル等を利用して自習しているが、今後も積極的に学習に取り組もうとする生徒を支援していきたい。 						

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
6 生徒の健康保持や安全確保に関する意識を高め、危機管理体制を構築していく。	① 健康・安全・防災への意識を持ち、危機に際して自ら判断し、行動できる生徒を育成する。	総務課 各学年	健康・安全・防災への意識を高める取組を行っている生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	86.2% A (a31.7%+b54.5%) <83.2%> 【R7新設の設問】 1年 84.9% A (a31.2%+b53.7%) <84.7%> 【－】 2年 85.8% A (a28.2%+b57.6%) <86.1%> 【－】 3年 87.5% A (a35.2%+b52.3%) <79.6%> 【－】	今年度の石川県による「県立学校における災害対応力の強化に向けて」の取組の一環として、生徒の健康・安全・防災への意識を高める取組の効果を計る指標として新規に導入した項目である。避難訓練をはじめ各種の学校行事および日頃から、自分自身で健康・安全・防災への意識を高める取組を行っている生徒が全体の8割を超えている。来年度も、さらに多くの生徒の意識を高めるように、各学校行事をその機会としてとらえ、適時指導していく。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
	② 危機管理意識を高め、不測の事態においても適切に対応できる組織体制を構築する。	副校長 教頭	危機管理意識を高め、不測の事態に対応する知識・技能を高める取組を行っている教員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	96.1% A (a39.2% + b56.9%) <88.2%> 【R7新設の設問】	今年度の石川県による「県立学校における災害対応力の強化に向けて」の取組の一環として、職員の危機管理意識向上のための取組の効果を計る指標として新規に導入した項目である。防災研修等の新規の取組や年2回の避難訓練の実施により、評価値は中間評価時よりもさらに高くなったが、危機管理意識を高く持ち、危急の際は率先して判断・行動し、生徒の安全を確保すべき職にある教職員の心の持ち様としては、aの数値が50%を超えるように、さらなる意識の向上に努める必要があると考える。	CまたはDの場合は、改善策を検討	7月、12月の学校評価にて評価する
学校関係者評価委員会の評価		<ul style="list-style-type: none"> ・防災に限らず、日常にある危険として、詐欺事件に巻き込まれないような啓蒙活動も継続してほしい。 ・安全に関わる取組をこれからも継続して行ってほしい。 					
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		<ul style="list-style-type: none"> ・現在行っている消費者教育講座等の外部の方による講演会等を継続し、これからも、社会をとりまく危険から自らを守る方法を伝えていきたい。 ・これからも健康・安全・防災への意識を持った生徒の育成と職員の危機管理意識の涵養に努めていきたい。 					